信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

1年1組

くらしの中から
～くいちゃんから教えてもらった、かけがえのない「今」～

# ありがとう、くいちゃん

1月、うさぎを一羽迎えました。食いしん坊で、大人しく、人懐っこいうさぎです。なかなかゲージから出てこないうさぎを前にし、餌を近づけたり、キャベツの道をつくったりしながら、どうやって外に出そうか試行錯誤が始まりました。「早く名前を付けてあげたい」と次の日から始まった名前決めでは、思いの込められた名前の候補がたくさん出て、なかなか決まりませんでした。うさぎや名前に込められた願いを伝え合い、話し合い、決まった名前は「くい」ちゃんです。「食いしん坊で可愛いね。これからもたくさん食べて大きくなってね」という思いが込められています。「くいちゃんのお散歩に行く」と言っては、抱っこをして自分の行きたい場所に連れて行っていた子どもたち。くいちゃんが抱っこをされそうになると走り始めたり逃げたりする姿を見て、「くいちゃんのストレスかも」「くいちゃん嫌がってるのかも」と言って、接し方が変わっていきます。行かせたい場所に誘導していた子どもたちが、「くいちゃんはどこに行きたいんだろう」と言って、くいちゃんを自然体験園に放し自分たちがくいちゃんに着いていくようになっていきました。みんなが外でくいちゃんと遊んでいる中、「くいちゃんが戻ってきたら嬉しくなるように」と言ってゲージの中やトイレをきれいにお掃除するKさんやSさんの姿もありました。くいちゃんを迎えたことで、初めて見る子どもたちの姿、考え、発見、思いに触れ、さらに楽しい時間が過ぎていきました。

言葉を発さず、表情も分からず、その場から動かない「よもぎ」から、たくさんのことを感じ、受け取ってきた子どもたち。そんな子どもたちがうさぎを迎え、より命を感じられるうさぎから何を受け取り、どんな学びをしていくのか、楽しみにしていました。これまで仲良くみんなで活動していた子どもたちが、うさぎを迎え変わっていきました。意見のぶつかりやけんかが増えました。譲れない、思い通りにいかないことに腹を立てることが増えました。くいちゃんを自由にさせてあげたい自分と、もっとくいちゃんを触って抱っこしたい自分の気もちで葛藤することが増えました。「くいちゃんにとってこの行動は良かったのかな」と自分の行動を振り返ることが増えました。このどれも、とても素敵な感情で大事にしていきたいと思いました。

2月13日、くいちゃんが亡くなりました。ちょうど、1年1組にくいちゃんを迎えて1ヵ月が経とうとしていた時です。子どもたちは思い通りに動いてくれないくいちゃん、言葉で意思疎通ができないくいちゃんに思いを寄せながら、自分なりの距離感で、自分なりのかかわり方で、1ヵ月を過ごしてきました。いつもよりほんのわずかですが、元気がないように見えたくいちゃん。子どもたちと「今日は触らないようにしよう」とゲージに入れて見守っていました。食いしん坊のくいちゃんがごはんを食べない様子、いつまで経ってもうんちやおしっこをしない様子に、時間が経つにつれて不安になっていきました。タブレットでうさぎの病気や症状を検索しては、報告してくれる子どもたち。「病院に連れて行くからね」と約束して下校になりました。放課後、動物病院に連れていくと、「寒さで胃腸が弱くなることがある」「新しい環境で1ヵ月が経ち疲れたかな」と教えていただき、調整剤を処方されました。家に連れて帰り、温かくしても何も食べないくいちゃんでしたが、お薬だけは頑張って飲んでくれました。いつまで経っても、ゲージに入ったままぐったりしているくいちゃんでしたが、明け方、ゲ

ージから出てきてわたしの隣まで来てくれました。撫でながらくいちゃんを応援していましたが、くいちゃんの心臓は止まってしまいました。硬くなっていくくいちゃんを抱え、「亡くなった」と頭では何となく分かりながらも、「どうにかできないのか」と受け入れられないまま涙が止まりませんでした。子どもたちに何て言おうか、どう説明しようか、分からないまま、子どもたちの前に立ち、そのままを伝えました。大声で泣く子、自分の席でじっと黙っている子、くいちゃんを抱きかかえる子、教室中が悲しみで包まれていました。その日は、子どもたちからでてきた、「くいちゃんに手紙を書きたい」「みんなで埋めてあげたい」「くいちゃんの好きなものをお供えしたい」「歌を歌ってあげたい」というくいちゃんにやってあげたいことを全部しました。手紙を書いていても、埋めていても、歌っていても、自然と涙が出てきます。教室に戻り、今の思いを語り合いました。「寂しいよ」「くいちゃんとわたしたちで仲良くなれて嬉しかった」「くいちゃんが来てくれて楽しかった」「くいちゃん優しい顔だったから、くいちゃんも楽しかったのかな」「くいちゃんとわたしたちでしあわせを作れた」と、今までわたしたちがくいちゃんから受け取ってきた気持ちを話してくれました。するとKさんが、「くいちゃんは天国から見守っているから、ずっといっしょだよ」と話してくれました。Kさんの言葉を聴いた子どもたちは、「心の中では生きてるよ」「小屋を見たらまだくいちゃんが居るみたい」「心の目で見たらくいちゃんは見えるよ」と、話し始めました。

くいちゃんが亡くなって一週間後、子どもたちに「わすれられない　おくりもの」という本を紹介しました。物語の中には、「（アナグマは）死んで、からだがなくなっても、心は残ることを、知っていたからです」「アナグマが残してくれたもののゆたかさで、みんなの悲しみも、きえていました」という言葉が出てきます。この物語や言葉に触れ、くいちゃんからのおくりものを子どもたちと一緒にお話したかったのです。子どもたちは、短い期間でも、くいちゃんがたくさんの思い出を残してくれたことを語り始めました。おさんぽしたり一緒に遊んだりしたことで、今の自分の心には「たのしかったな」「しあわせだな」という気持ちが残っていること。隙間を見ると、そこに居たくいちゃんを思い出すこと。くいちゃんに笑顔をもらったこと。しかしそんな温かい気持ちと共に、やっぱり、「寂しい」「悲しい」という思いを抱えていることもお話してくれました。Yさんは「もう1回くいちゃんと遊びたいよ」と呟きました。くいちゃんが生きて一緒に過ごしていた時も、亡くなった今も、わたしたちはくいちゃんから、たくさんの「気もちの贈り物」をもらっていることに気づかされました。また、Yさんの「もう1回」という思いに共感し、かけがえのない「今」に気づかされました。当たり前に来ると思っていた、くいちゃんとの「明日」。「おはよう」とくいちゃんが教室で出迎えてくれていたことや、一緒に遊んでいた時間がどれだけかけがえのない時間だったのか。だからこそ大切な人と一緒に過ごせる「今」を大事に、感謝しながら生きていかないといけないことを子どもたちと語りました。授業の最後には、みんなで「今を大事に生きよう！」と話しました。

わたしは、子どもたちの言葉、考え方、姿に救われました。しかし、やっぱり、死なせてしまったくいちゃんにも、切ない思いをさせてしまった子どもたちにも、申し訳ない気持ちでいっぱいです。わたしがずっと飾っていたひよこの人形に「くいちゃん」と名付けて、くいちゃんにしてあげていたように人形に接する子どもたち。何か物音がすると、「くいちゃんだ！」と言う子どもたちを前に、切なくなり、何と言葉をかけていいのか分からずにいます。もっと早く動物病院に連れて行ってあげられれば、もっと温かくしていてあげれば、もっとできることがあったのではと、悔しい気持ちでいっぱいです。しかし、くいちゃんの死を、子どもたちにとってマイナスなものにしたくない。くいちゃんを迎えたことを後悔したくないし、後悔させたくない。（、、、だからと言ってくいちゃんの死を学習にも利用したくない、、、）

くいちゃんが亡くなってから、くいちゃんのお墓参りが1年1組の毎朝の日課になっています。くいちゃんの好きだった食べ物をお供えする子、「くいちゃん天国で何してるの～」と話しかける子、「教室からお祈りするね」と遠くから手を合わせる子など、くいちゃんが亡くなってからも毎日それぞれにくいちゃんと関わり続けています。切なさを抱えながらも、くいちゃんの死を受け入れ、くいちゃんから受け取ったものを見つめ、子どもたちと前に進んでいきたいと思っています。